射水

射水神社社報　平成21年1月発行

第11号

ご挨拶

射水神社宮司　松本正昭

皇紀二千六百六十九年平成二十一年の初春を迎え、新年を寿ぎ賀詞を申し上げます。

本年は、畏くも天皇陛下が御位に即かれてより二十年目を恙なく迎えられましたこと、国民斉しく慶びとするところであります。

折しも慶長十四年、加賀二代藩主前田利長公は小矢部川・千保川・庄川の天然の防禦を備えもち、そして射水・砺波平野の穀倉地帯や外港となる伏木・放生津を結ぶ船運に恵まれた関野の地・高岡台地（古城公園）を敵地とし、現在の射水神社鎮座地に本丸を構え高岡城としての城郭を構築し入城されたことは周知のことであります。そして千保川の水利を生かし高岡産業を起こし、平安楽土を乞い願い中国最古の詩集「詩経」の「鳳凰鳴矣、于彼高岡」から「高岡」と名付け、以来、今年、開町四百年を迎えましたことは、真に目出度いことであり、高岡市の更なる隆昌を祈念するところであります。

惜しくも元和元年、徳川政権下の一国一城制により高岡城が廃城を余儀なくされたことは残念なことではありますが、明治八年、民意暢達の名のもとに、当時の高岡区長・服部嘉十郎氏が公園に指定せられんことを請願し、時同じくし、射水神社は長い年月に亘って鎮座されていた二上山麓から、国幣中社として相応しい地とし高岡城本丸跡地に遷座することの二つが認可されたのであります。

前田利家・利長公は、二上神（射水神社祭神）の信仰厚く、幾度となく戦火により焼失した社殿を修復し、手厚い庇護の下に戦乱の世に中断された報謝米の制度をも復活し、それ故に、明治四年、国幣中社列格に際しては、初代宮司に加賀藩家老・青山直次氏が就任、青山氏は本丸跡地の遷座に一躍を担ったことであります。

このように、射水神社は利長公とも縁深きところでもあり、開町四百年奉祝にあたり、威徳を偲びつつ顕彰祭を斎行し、諸行事を計画し準備を進めているところであります。

平成二十一年の年頭にあたり、崇敬者各位には、活力ある歳になりますようご祈念申し上げます。

奉賛会報告

今回は、奉賛会関連よりの特別寄稿を掲載致します。

小杉　礼一郎（オレゴン州在住　54才）

高岡で生まれ育った私は、十八の時故郷を離れ、あちこちの日本の山を眺め、登ってきました。やがて世界各地の山へも行き、今では米国オレゴン州に住んで二十年になります。この間あっという間でした。これは、今秋、久々に高岡にゆっくり滞在した浦島太郎のつぶやきです。

私は機会に恵まれ世界各地の大自然、高峰と大峡谷、平原や氷河などの原始景観をたくさん見てきました。すると時折日本に帰ると視野に入るものが何もかも小さく見えてしまいます。それは部屋や建物、乗り物だったり、街や川や湖や平野だったりします。例えば庄川や小矢部川を車や列車で渡る時には「こんな小さな川だったか…」と思います。そういう風に何でも小さく見えてしまう故郷の景色ですが、二上山だけは逆に大きく見えてきました。

「あー高岡に帰ってきた」となによりも私に感じさせるものは二上山です。

時代は移り、世界は動き自分も齢を重ねます。日本が変わり、高岡の街も人々も変わっています。すべてが変わる中にあって変わらないもの、ここが故郷だという確かな証しが私にとっては二上山なのです。

「ねえ、あの山の高さ、どれくらいだと思う?」二上山を指して県外や国外から来た友人何人かに訊いてみたことがあります。彼らの答えのほとんどが６００から９００ｍの間でした。「あの山は標高２７４ｍ」と私が言うと皆びっくりします。高岡の街なかから二上山頂までは約５㎞、仰角は立山連峰を望むよりほんの僅かに高い。街とのその絶妙な隔たり、横に張ったすっきりした山容と北の背後にひろがる空がこの山を何倍も大きく見せるのでしょう。ビルなど、こちらが高い所に上がれば二上山はさらに高く大きく目に映るのも不思議です。

今回の高岡滞在中、そんな理屈を考えるのはやめて、しばしじっと二上山と向かい合いました。この山の深緑を見ていると次第に心が鎮まってきます。そんな暇もなく今日まで来たことに先ず驚き、やがて山と私の心は勝手にお喋りをはじめます。

『故郷の山は有難き哉』、その「ありがたい」の意味。万葉の時代のはるか前からそうであったように、二上山は、今この山を見ている人々がすべて代がわりした後もやはりそのたおやかな佇まいでそこにあるのだろう。本当に「在り難い」のはこの山ではなく実は今ここに生きてこの山を眺めている自分（達）の不思議だ・・・。

この故郷の山は街に近すぎず見上げるほどではありません。しかし顔を上げればいつもそこにある。天気の悪い日、立山連峰も南砺方向の山も見えない時、雨幕を通してでも二上山だけは見える。それは私には「見える山」「見る山」でなく、晴れの日も雨の日も母の心のように「見守ってくれている山」なのです。

有史前から二上山はいったい何千万人の人々の遷りかわりを見守ってきたのだろう?想像するしかない過去から未来へと続く永久（とわ）なるものが実際にそこにあること、そして今また海の彼方に戻った私の心の中にも確かにあることの不思議。それは畏敬の念という言葉を越える言い表せぬ想いです。地球上に高い山はいっぱいありますが私の二上山は此処にしかない。私の不思議な山の有難さ、人に話しても判ってもらえないかもしれませんが。

社の景色

杜の景色（下半期）

6月30日　夏越大祓
7月上旬　職場安全祈願祭
7月上旬　奉納書道展
7月10日　悪王子社秋祭
8月27日　諏訪社例祭
9月16日　秋季大祭
9月22日　日吉社秋祭
11月1日～30日　七五三まつり
11月3日　明治祭
11月23日　新嘗祭
12月23日　天長祭
12月31日　師走大祓及除夜祭

奉納書道展

本年も高岡市を中心とした書道に親しむ方々のご協力を得て、賑々しく奉納書道展が開催されました。

くしくも平成二十一年は、高岡市開町４００年の記念の年と、当社が行ってまいりました奉納書道展が、第30回の節目の年を迎えます。

例年、多大なるご助力を賜ります射水神社奉納書道展実行委員会のみなさまとも十分に協議し、本書道展もまた、豊かで明るい高岡をイメージできるよう、工夫をこらしながら、準備を執り行ってゆきたく存じます。

境内紅葉

当社におきましては、参道脇の紅梅・白梅が、つとに有名となってきてはおりますが、秋もまた手水舎および包丁塚付近は、秋の訪れを感じさせるかのごとくもみじが色づき、参拝者の方々を魅了しております。

本年は暖冬との予測。もみじ達も例年よりのんびりと色を変えてゆきました。

思うに地球温暖化が叫ばれる昨今。自然のありようからワンテンポずつ遅れてゆく人間。木々は何も変わることなく四季折々に変化して行きます。紅葉が遅い。桜が速いとの概念から、もう一歩踏み込んで、森羅万象の営みを見つめて行く必要を痛感します。

絵画奉納

当社にて用務でのご奉仕を賜ります、石田勝二様より、絵画のご奉納を賜りました。平素のご奉仕においては、職員より「画伯」と呼ばれ、気のいい用務員さんとして知られておりますが、ご奉仕のかたわら写真や絵画などの多趣味をもって知られ、絵画に関しては高岡市美術展において二度、大賞の栄誉を与えられる、町の大画伯であります。

今回ご奉納いただいた絵画は「水車小屋」。画伯の代表作の一つ「船小屋」などを例に引くまでもなく、人里の素朴で愛らしい風景を一幅の絵画におさめる、画伯独壇場の力作をご奉納賜りました。

平成二十一年

新年初祈祷のご案内

個人祈祷

一、厄年祓

本厄
四十二歳（男）昭和四十三年生
三十三歳（女）昭和五十二年生
二十五歳（男）昭和六十年生
十九歳（女）平成三年生

前厄
四十一歳（男）昭和四十四年生
三十二歳（女）昭和五十三年生
二十四歳（男）昭和六十一年生
十八歳（女）平成四年生

後厄
四十三歳（男）昭和四十二年生
三十四歳（女）昭和五十一年生
二十六歳（男）昭和五十九年生
二十歳（女）平成二年生

一、祝事（男女）

還暦（かんれき）六十一歳 昭和二十四年生
古稀（こき）七十歳 昭和十五年生
喜寿（きじゅ）七十七歳 昭和八年生
傘寿（さんじゅ）八十歳 昭和五年生
米寿（べいじゅ）八十八歳 大正十一年生

一、商売繁昌祈願
一、家内安全祈願
一、合格祈願
一、初宮詣
一、安産祈願
一、その他緒祈願

◎初穂料　五千円より志
（但し厄年祓・祝事祈祷はお酒・鏡餅等お供え下さい）

団体参拝

※事前にご予約下さい

一、職場安全・商売繁昌祈願等

◎初穂料　二万円より志
◎お供物　お酒

◆祈祷受付時間　元旦　午前0時～午後五時／二日以降　午前九時～午後五時

お問い合せ　社務所　電話0766(22)3104

神前結婚式

御神恩をいただき、幸おおからん事を。

平成20年6月挙式の方々

湊　龍太郎・由佳
國澤　晃・いづみ
四枚田　正史・靖子
酒井　真克・真実
安武　悠貴・梨加
塚田　哲也・幸恵
笠谷　明宏・留理子
東　浩之・真智子
内島　勝・劉娜
高木　義之・優子
矢後　学・ちえ子

平成20年7月挙式の方々

板本　範志・泰子
小森　功裕・麻美子
大島　哲・美樹子
室井　武司・紀子
西田　克美・恵
佐野　吉英・江利子

平成20年9月挙式の方々

西岡　圭志・夕紀子
大野　恭史・香代子
倉田　佳典・亮子
吉澤　邦夫・聡子
杉田　和浩・杏子
吉澤　毅・泰子
後藤　隆宏・真梨

平成20年10月挙式の方々

田中　成興・有美
中川　慎也・恵理佳
吉田　弘幸・允美
山屋　章・みか
水戸田　暁・美幸
森　達也・ゆか
西江　大輔・智子
伊東　博光・裕美
高橋　正則・美穂
ジェームズ　ロバーツ・寛子
若井　孝裕・慶子

森田　晶人・寧子

平成20年11月挙式の方々

長谷川　由和・めぐみ
川見　稔・香織
宮田　嗣大・真琴
小野寺　元・有紀子
松本　吉史・輝美
島崎　裕介・美樹子
谷畑　精教・幸恵
荒俣　行紘・佳用子
坂口　賢二・香織
坂森　文明・菜穂
藪中　一徹・千里子
滝井　雅人・美紀
御器　潤一郎・祐子
室崎　毅弘・梓
川端　雅人・まゆみ
屋木　和夫・昌美
定塚　康孝・香織

平成20年6月～11月挙式の方々

越中の食彩

山田酒店　山田勝久

富山の酒について

「お神酒上がらぬ神はなし」と云いますが、神事には、古来よりお酒は欠くことのできないものです。

富山県は豊かな自然と、その恵みによって、美味しいお酒が数多く造られています。現在、県内には25蔵があり、古くは江戸時代の初期に創業している蔵もありますが、大半は、江戸時代後期から明治時代に創業されたようです。明治4年に新免許制度が導入され、ピーク時には、222場もの蔵が営業していたようですが、その後の戦争や恐慌で廃業が相次ぎ、また、昭和の高度成長期以降、灘、伏見の大手酒メーカーの製造販売戦略に飲み込まれ、地方の蔵は衰退していきました。しかし、そのような逆境があったからこそ、これまで以上に手間隙をかけ、酒質を磨きあげ、大手メーカーとは一線を画くことで、再び愛飲者からの支持を得ることができました。

では、愛飲者から支持される酒質の由来はどこにあるのでしょうか。

まずは、お米のことですが、県内の各蔵とも酒造好適米（お酒造りに適した米のこと）の使用割合が高く8割を超えています。（全国平均約2割）おそらく全国一と思われます。

そしてこのお米をよく磨きます。飯米よりも2割以上多く精米します。普通酒で3割（精米歩合7割）、吟醸酒などでは4割から7割近くも磨いています。これは、玄米を精米していくと、デンプン以外の部分（タンパク質、脂肪分、ビタミンなど）が削られて減少していきますが、これらの物質が多いままだと、麹菌や酵母の生育が進みすぎたり、香りの生成が阻害されたりします。また、タンパク質は、お酒の味の主成分であるアミノ酸になりますが、多すぎると味わいを損ねます。また、精米歩合が低くなるほど、鉄やマンガンなど酒質を劣化させる成分も少なくなるメリットがあります。

つぎに大切な原料の水ですが、水は、その成分が酒質に大きく影響します。特に原酒の割水では、規定のアルコール度数まで薄めるため、水の成分の良し悪しが酒質に直接影響します。富山県には良質（ほど良い量にミネラルを含んだ）の湧き水が多く、各蔵ではこれらの水を仕込みに使用しています。この水の良さは正に富山県に与えられた自然の恵みです。食の安全が問われる今日にあって、富山県の蔵元は、正直に一生懸命に良いお酒を醸しています。近年、日本酒の消費量が低下していますが、お近くのお酒屋さんや、直接蔵元を訪ねて、郷土のお酒に触れてみてください。美味しい発見があるはずです。

県内での酒造の姿

神道いろは

直会（なおらい）の意義について教えて下さい

直会とは、祭りの終了後に、神前に供えた御饌御酒（みけみき）を神職をはじめ参列者の方々で戴くことをいいます。

古くから、お供えして神々が召し上がった食物を人々が戴くことで、神々の恩頼（みたまのふゆ）を戴くことができると考えられてきました。この共食により神と人が一体となることが、直会の根本的意義であるということができます。

簡略化されたものとして、御酒を戴くことが一般的な儀礼となっていますが、これは御酒が御饌の中でも米から造られる重要な品目であり、また調理をせずにその場で直接頂くことができるため、象徴的におこなうものとなりました。

神々にお供えした物を下げて頂くということは、宮中においても毎年おこなわれる新嘗祭（にいなめさい）の際に、天皇陛下が親しく新穀を神々に捧げ、また御自らも召し上がるという儀礼に見ることができ、「神人共食」という祭りの根本的意義が示されています。

直会の語源を「なおりあい」とする説があります。神職は祭りに奉仕するにあたり、心身の清浄に努めるなどの斎戒をします。神社本庁の「斎戒に関する規程」には、「斎戒中は、潔斎して身体を清め、衣服を改め、居室を別にし、飲食を慎み、思念、言語、動作を正しくし、穢（けがれ）、不浄に触れてはならない」とあるように、通常の生活とは異なるさまざまな制約があり、祭りの準備から祭典を経て、祭典後の直会をもってすべての行事が終了し、斎戒を解く「解斎」（げざい）となり、もとの生活に戻ります。「なおらい」の語源は、「もとに戻る＝直る」の関係を示して直会の役割を述べたものであり、直会が祭典の一部であることを指しています。

直会が神事として一般の宴とは異なるのも、こうした意義をもっておこなわれているからなのです。

『ふるさと射水神社』

⑪初穂知識米 ～かんまんぼろ～

「越中二守山由来」によると「人身御供」を停止した代わりに「初穂知識米」を徴収することになったとある。『高岡の伝承』（昭和五十四年刊）によれば高岡市周辺では、明治生まれの人たちは子供の頃、いたずらをすると、「二上山来っぞ！」「かんまんぼろ来っぞ！」と江戸時代生まれの親から、おどされたものだという。「二上山、ふたがみさーん。」と「二上山から神様が米を集めにござった。」また「石動山、せきどうさーん。」と富山・石川県境にある石動山からも米を集めに来たらしい。江戸時代、二上山から集めに来るのは山伏姿の荒くれ男達で、各家から米を一升ずつ集めて廻っていた。出すのが遅かったり、盛りが悪かったりすると、それこそどやしつけられて、ことに来たての若嫁さんなどはかってがわからないのでビクビクものだった。この二上山の男達は「かんまんぼろ」と呼ばれ、秋の取入れ時期になると領内一円から集めまわったのである。〝ふたがみさーん〟が来たら米二升、〝せきどうさーん〟が来たら米一升という話も伝えられている。石動山の坊主が錫杖ふって米を取りに来たら、自分の食べる分がなくても供出させられるほど強圧的で恐ろしかったが、二上山の方は地元ということもあってか、石動山ほどには怖いイメージがなかったが、城端などでは地元でないせいか〝二上山〟もけっこう恐ろしがられていたらしい。

「かんまんぼろ」は「カンマン・ボロン」で〝カンマン〟は不動明王の種字、〝ボロン〟は一字金輪の種字あるいは真言の結語である。「怨敵退散！カンマン、ボロン。家内安全！カンマン、ボロン。」と念珠を摺りながら声高に祈りを唱える山伏姿の男達が、大きな袋を背負って「初穂知識米」を集めて廻ったのである。

下記の定書きは慶長十五年（一六〇〇年）加賀藩二代藩主前田利長公によるものであり、二上山養老寺が江戸時代以前すでに前田氏に認められるほどの格式と実力を有していた事を示すものである。「初穂知識米」の制度は、加賀藩の保護の下、明治三年の神仏分離令まで続くのである。

『高岡の伝承』より

定

二上山権現知識初穂米従越中四郡
軒別一升宛永代取集弥為精誠武運
永久国家安全五穀成就被抽懇祈長
日勤行不可有怠慢之状如件
慶長十五年三月十八日
前田利長　御在判
祈願所　養老寺

（二上山権現の初穂知識米は越中四郡より一軒ごとに一升ずつを永遠に取集め、真心こめて加賀藩の武運永久・国家安全と五穀の豊穣が更に成就する為に、懇ろな祈祷を執り行い、長期間のお勤めを怠ってはならない事はこれまで通り許可するものである。）

編集後記

表紙の写真は、高岡市の「雨晴海岸」の写真でございます。この海岸には、奥州に逃れる義経一行が雨宿りをしたと伝わる岩があり、美しい景色と同時に、歴史の哀歌を切々と歌い上げる景勝地でもございます。源義経に対しては、現在まで様々な解釈がなされており、司馬遼太郎氏などは「騎兵を操る世界史上まれなる天才」また「天才ゆえの政治感覚の欠落」などを指摘する向きもあり、我々は残された史料によって、その心情を推し量るより他はありません。ただ一点。

皇后陛下の御言葉。以下、恐れながら割愛し、ご紹介申し上げます。

・・・前略・・・

一国の神話や伝説は、正確な史実ではないかもしれませんが、不思議とその民族を象徴します。これに民話の世界を加えると、それぞれの国や地域の人々が、どのような自然観や生死観を持っていたか、何を尊び何を恐れたか

・・・後略・・・

（第二十六回ＩＢＢＹニューデリー基調講演より）

この御心を旨とし、物事を学ぶ必要があると編者は考えます。特に歴史を扱う場合、善悪の価値判断を急ぐ必要はないはずであり、とかく合理的視点でのみ、祖先の残した史料を見つめる傾向にありますが、我々日本人が、そのような視点にのみに句泥する時は、日本というものが、音もなくこの地上から消え去る時なのだと考えます。

発　行　射水神社
発行所　〒九三三―〇〇四四　高岡市古城一―一
TEL　（〇七六六）二二―三一〇四
FAX　（〇七六六）二二―三七一五
印刷所　キクラ印刷株式会社

参集殿通信

手水の儀

水面（みなも）に宿る神様の
お力を借りご神前へ

八百万（やおよろず）の神々に見守られながら

――うつくしの杜ブライダルフェアのご案内――

Utsukushi no mori Marriage story

みつめ合い、信頼しあい、いつまでも！
平成20年10月挙式　水戸田様ご夫妻

射水フェスタ 2009

平成21年2月22日（日）
11:00～18:00

・模擬挙式・模擬披露宴
・トータルコーディネートショー
・ブライダルケーキ試食
・会場コーディネート展示
・料理・引出物展示
・和装・洋装衣裳展示
・ネイルアート体験
・相談会

うつくしの杜 新緑フェスタ

平成21年5月3日（日）
10:00～17:00

・模擬挙式
・結びのセレモニー・ビデオレター
・会場コーディネート・引出物展示
・婚礼料理試食会
・衣装・婚礼アイテム展示・相談会

うつくしの杜、結婚式場

射水神社

〒933-0044 高岡市古城1番1号（高岡古城公園内）

お問合せ (0766) 22-0808

U R L ■ http://www.imizujinjya.or.jp
Eメール ■ jinjya-k@mbs.sphere.ne.jp